

『神曲』浄罪界第三十歌
新道德と新不道德(*評論)

ダンテ

エレンケイ、らいてう訳

逝く春の頃(小説)

斎賀 琴子

憐愍(小説)

生田 花世

母の実る頃 一幕(脚本)

岡田 幸子

吾兄と虞美人草(短歌)

原 阿佐緒

愛のなやみ(短歌)

岡本かの子

恋愛と芸術(評論)

山田 わか

灰(小説)

五明倭文子

邂逅(小説)

新免さかえ

少女と自然(*随筆)

加藤みどり

線路(*小説)

吉屋 信子

なやみの歌(短歌)

杉浦 翠子

歓楽(短歌)

江森 笙子

叱らるゝ子(短歌)

山田 邦子

涙(小説)

山田 たづ

日記の中より(*随筆)

村岡 たま

編輯雑感

邦子/倭文/花世/たづ

生田長江

河井醉茗

秀 頼音

三ヶ島霞

岩淵百合

川路歌子

新免さかえ

村岡たま

上野山清貢

ギルマン

杉浦翠子

森田草平

遠藤琴子

久保田富江

杉浦非水

山田邦子

岡田八千代

ケイ、エレン

世良田優子

山田たづ

岡田幸子

五明倭文子

ダンテ

山田わか

岡本かの子

斎賀琴子

原阿佐緒

吉屋信子

奥村 博

坂本真琴

平塚らいてう

若山喜志子

加藤みどり

桜井八重子

町井久子

鷺尾よし子

*本復刻版では第一巻第二号、第二巻第三号のうち、
第一巻第四号及び第二巻第二号は原本未見のため、収録されていません。

●関連図書のご案内

吉屋信子 主宰〔大正14年1月〜8月刊〕ISBN4-8350-1435-9

黒薔薇 くろしょうび

若い女性に圧倒的な支持を得ていた、フェミニスト作家の先駆・吉屋信子が
自ら創刊した個人雑誌。性差別社会を撃ち、同性愛を堂々と謳った本誌は、
吉屋の真骨頂を示す最重要資料。

推薦 駒尺喜美

●定価 本体20,000円十税/四六判・上製・630頁/01年10月刊〔復刻版〕

岩田ななこ 著 ISBN4-8350-1261-5

文学としての『青鞥』

『青鞥』の本質は文学にある――

女性による女性のための文学雑誌として登場した『青鞥』は女性解放雑誌として
展開したのちも、女性たちの文学的自己表現の場でありつづけた。
これまで評論家を生み出した雑誌として評価されてきた『青鞥』を
文学そして女性文学者の視点から読み解いた、新しい『青鞥』像。

●定価 本体1,800円十税/四六判・上製・カバー装・260ページ/03年4月刊

●表示価格は全て税別

不二出版

〒113-0023

東京都文京区向丘1-2-12

電話 03-3812-4433

ファクシミリ 03-3812-4464

振替 00160-294084

『青鞥』廃刊直後の一九二六年七月に創刊された本誌は、
『女子文壇』『青鞥』に連なる、女性に開放された自己表現の場であった。
執筆者には平塚らいてうのほか、今井邦子・生田花世・
岡本かの子・吉屋信子・三ヶ島霞子・原阿佐緒などがある。
女性文学雑誌の枠にとらわれず、
女性問題への関心も深い。
近代女性史・文学史の貴重文献として復刻。

ビートルズ

全二巻

復刻版



一九二六年七月〜一九二七年四月/ビートルズ社 発行
●定価 本体一八,〇〇〇円十税 菊判/上製/総六五〇ページ/二〇〇三年六月刊
●解説 岩田ななこ ●推薦 吉川豊子

不二出版

「『青鞥』文学」の全容が明らかに

吉川 豊子（山梨県立女子短期大学国文科 教授）

『女子文壇』に始まり『女人芸術』に至る女性文芸誌の流れの中で、『青鞥』につづく雑誌として『番紅花』と『ピエトリス』があることは知っていたが、今ここに『ピエトリス』が復刻され、『青鞥』文学の全容が明らかになった。

岡本かの子が毎号、短歌を発表している。堀切茂雄との恋愛、精神病院入院、二児を失い堀切とも死別するなど、修羅場をくぐったかの子はどんな歌を詠んでいるのか。

また、『青鞥』最後の二号（第六巻一、二号）に詩や小品を発表した吉屋信子が、本誌の発起人・社員となつて、創刊号から作品発表を続けていることも注目される。信子の少女小説の代表作『花物語』が『少女画報』に連載開始された年・月が本誌の創刊年・月に重なるからだ。出発期の吉屋文学を考察するうえでも本誌は貴重な資料である。

さらに『青鞥』では平塚らいてう、山田わか等によって精力的に翻訳・紹介された「母性主義」フェミニスト、エレン・ケイとは異なり、女性の労働権・経済的自立と家事労働の社会化を唱えたアメリカの「女権主義」フェミニスト、C・P・ギルマンの女性論を積極的に翻訳・紹介した岡田幸子の活躍も、第二の「新しい女」の生の模索として、たいへん興味深いものがある。

●内容見本

赤い帯

吉屋 信子

おしづさんは、私の父の異母弟のごもだつた。

私のお祖父さんは「こんなこと言ふのは嫌だけれどもお妾を持つて居たので、お妾の子が私だちの叔父さんにあたる。だから、おしづさんは私の従姉であつた。」

なぜか、私の家ではおしづさんのことを、あんまり大事にしなかつた。

私の父も母も、けつして悪い人ではなかつたけれども、すいぶん私と兄妹が、たくさんゐたし手がまはらなかつたりしたから、それに、父も母も悲しいことに、まだ神様のお心をよく知らなかつたからである。たしかに。

おしづさんは私より二つ三つ年上のやうだつた。そして私などよりぐつと心持もませてゐた。

やうであつた。

あんまり口数はきかずに、いつも水底に咲く藻の花のやうに、沈んだ瞳をして、ぼんやりと何處を見つめるとなく涙ぐんで見入つてゐるやうな、ひ弱い娘だつた。

おしづさんには、お父さんもお母さんもなかつた。よくは知らないけれども、きつと死んでしまつたのであつたかもしれない。

大きくなつてからも、おしづさんの身の上をしつこく母になどきくと、（ごどもは知らなくつてもよいことだからね。）と叱られたりしてしまふ。から私はよくはわからない。

たい、いまでも一番はつきりわかることは、おしづさんが可愛想な娘だつたことである。

私はよく思ふ。おしづさんがいまうで生きて

注文カード

帖合・書店名

注文数

冊

不二出版

復刻版 ピエトリス

●定価＝本体二八、〇〇〇円十税

ISBN4-8350-1522-3

お客様名

電話

注文年月日 年 月 日